

# 風と存在

W. B. Yeats's *The Wind among the Reeds*

---

石川隆士

---

1806年、英国海軍のFrancis Beaufortが初めて風を数値化した。それは現在もなお気象観測の基準として使用されている Beaufort scale の原型である (Scott Huler 69-70)。こうした風を定義したいという欲求は太古から延々と続くものであり、その欲求の充足のされ方は2つに大別される。一つはBeaufortに代表されるように物理的現象として風を解釈するものであり、その起源は風を大地の呼吸と定義した Aristotle に求めることができる。もう一方は、風を超越的な力の表象として捉えるものであり、すでに Homer や聖書にそれが見て取れる。

自然現象の中に数多くの象徴的な意味を見出す W. B. Yeats にとっても風は特別な意味を持つ。しかしながら彼の風に対するアプローチ、解釈は上記の2つの潮流のいずれからもわずかに逸脱している。そのずれは、風という存在に対する本質的な認識の違いから生じるものと考えられる。本論においては、特にそのタイトルにおいて風がクローズアップされている詩集 *The Wind Among the Reeds* をとりあげ、Yeats の詩作における風の存在論的役割を検証する。

## I

まず、Yeats の風という存在に対する認識と、風の表象における2つの潮流におけるそれとの相違について明確にしておきたい。もちろん Yeats の認識といっても、彼個人の特異性というよりは、彼が詩によって表現しようとするものの性質に依拠しているので、広くケルト文化の伝統に根ざしている認識と大きく関係している。いずれにせよ、その相違とは存在そのものの捉え方にあ

る。本論のタイトルとして「存在」という言葉を与えたが、本論におけるこの言葉の意味をより明確に定義するならば“presence”とするのが適切であろう。そしてこれに“existence”を対立させたい。もちろん、これらに対して特に区別を与える必要のない場合が多いのは先刻承知のことである。しかしながら、Yeatsの風に対する存在認識と上記の2つの潮流におけるそれとを弁別するにあたっては、“presence”と“existence”の概念上の差異が重要な役割を果たす。

Presenceは、ラテン語系の意味素preとsens (= sum) から成り立っており、「前に存在する」という表現があてはまる。言うまでもなくsumはそのまま存在することを意味するのであって、そこにpreという接頭辞が付くということは、その存在自体に別の側面が付与される。例えばpresenceの反意語であるabsenceと比較してみれば、その側面がより明確になるかもしれない。もちろんabsenceも意味素abとsensから成り立っており、比較の焦点は接頭辞abに絞られる。このラテン語系の接頭辞は「離れる」という意味を持っており、absence全体では「離れて存在する」ということになるだろう。Absenceは通常不在を示す言葉である。しかし、この語源を念頭に置けば、その不在とは「無」ではない。ある場所から離れて存在しているだけなのである。

さて、その「ある場所」とは何か。それはつまり、その存在を認識する主体である。その主体の認識の外側にいることを、不在といっているのである。翻ってpresenceとは、その主体の認識の内側、つまり、その眼前にいるからこそ存在しているといえるのである。このように、presenceで表現される「存在」は、その存在する事物を認識する主体を同時に含意しており、その意味において事物の極めて現象学的な存在性を示している。

一方、existenceは語義的にstand、つまり立つことを再帰的に強調した表現である。そこには事物それ自体が、その内在的な力によって屹立している様子がうかがえ、それを認識する者の存在は必要とされていない。それは、認識とは無関係な自立的な存在のあり方を示すものであり、物質的、客観的な存在のあり方を示すものである。

もちろんこうした、相違に基づいてpresenceとexistenceを事細かに使い分けることは現実にはまれであるが、本論においては厳密に定義しておきたい。そ

してこの定義に従えば、Yeatsは風を presence という認識で捉えている。そして対する、伝統的な二つの潮流は existence という認識である。*The Wind Among the Reeds*の分析に入る前に、後者の説明から始めたい。

例えばHomerにおけるBoreas, Euros, Zephyros, Notosは単純に言えば、風の擬人化、あるいは擬神化であって、超越的な存在として人間の認識に関わりなく存在するものとして表象されている。それが正しいものであったかどうかは抜きにして、Aristotleの風の原理の探求も、Beaufortの風力の定義も、人間という時間的にも空間的にも限定された存在の認識を超えた普遍的な物理現象として風を捉えている。

おそらく、これら二つの潮流を existence という括りで一つにまとめてしまうことは、例外的かもしれない。通常これら2つの流れは、前者は詩的想像力、後者は科学的分析として対立概念として設定され、この二項対立に基づいて議論が進められるであろう。しかし、Yeatsの風に対する認識の特異性は、これらの伝統を existence として表現される存在論の下にひと括りにしてこそ浮かび上がってくる。

またもうひとつあらかじめ述べておかなければいけないのは、本論における presence と existence の対立も、単純な主観論と客観論のそれではないということである。Yeatsの風に対する認識については脱中心的という表現が当てはまる。それは何を意味するかといえば、風が存在を考えると、風そのものを認識の対象にするというよりは、風と他のものとの関係性において風を捉えるからである。奇妙なことであるが、風を認識の目的物としながら、その中心に風はないのである。この意味において、Yeatsにおける風の存在性を考える場合、相手の存在を確固たるものとして考えるよりも、人間の認識の風景の中で相対化されながら捉えられる存在性を presence という言葉で考えている。

## II

Allen R. Grossmanによれば、「葦間の風」は象徴的に“aeolian harp”を指し示す(51-52)。それは、そのままPercy Bysshe Shelleyが“A Defence of

Poetry”において展開する詩論の中で主張する詩人の代名詞である：

Poetry, in a general sense, may be defined to be “the expression of the Imagination”: and poetry is connate with the origin of man. Man is an instrument over which a series of external and internal impressions are driven, like the alternations of an ever-changing wind over Æolian lyre, which move it by their motion to ever changing melody. (480)

この主張の中で Shelley は人間性の根源に詩的感受性を求め、その詩的感受性の働きが表現するものが詩であるとしている。そして、明示されてはいないが、その感受性の働きこそが想像力ということになる。

ここで注目しなければならないのが、“the alternations of an ever-changing wind”あるいは“ever changing melody”という形で表現されているものは一体なにかということである。“Æolian lyre”は、これらの動きに呼応して、音を奏でる、つまり詩を想像するのであろうが、それはきわめて受身的な役割であって、その感受性の活動の起源は、その豎琴を動かす力であるはずである。しかし、それがどういったものなのかは明らかにされていない。もちろん、そのような形でしか表現できないような、詩的想像力あるいは靈感の源泉であるということ構わない。ただ、「豎琴をかき鳴らす力」としてしか表現できないものであるということとは指摘しておかなければならない。

この「豎琴をかき鳴らす力」のような表現によって、詩的想像力が表現されることは、すでに決まり文句のようにになっている以上、特記するほどのことでもないように思われる。特に、Shelley が述べているのは詩、あるいはそれを想像する詩人の特性を述べているのであって、その論点の中心が明確になりさえすればいいのである。翻って、前述の Allen R. Grossman の言に戻ってみると、彼の論じている「葦間の風」、原文をそのまま引用すれば “Yeats’s image of wind in reeds”, の論点の中心はどこにあるのであろうか。「葦間の風」という表現全体で、詩人の詩的想像力の活動全体を指摘することはできるが、その場合少なくとも “aeolian harp” と読み替えられるのは「葦」であって「風」ではない。一方 “The Wind among the Reeds” の意味論的核は間違いなく「風」であり、「葦」ではない。

“The Wind among the Reeds” は詩集のタイトルであって、同名を冠した詩篇は存在しない。これは Yeats 自身がこのタイトルを念頭に置きつつ、創作をしている間に Nora Hopper という作家兼ジャーナリストが同名の詩を *Ballads in Prose* という作品の中で発表してしまったことが原因かもしれない。それは詩集としての *The Wind among the Reeds* が出版される5年前のことである。Yeats の側としては “The Wind among the Reeds” という表現について、Nora Hopper に先がけて、公の場において何度も言及したらしく、著作権とは言わないまでもそのオリジナリティについては自分のものであると、Nora Hopper の同詩の出版に関し戸惑いを隠していない：

She[Nora Hopper] has unfortunately copied the title of my new book, ‘The Wind Among the Reeds’, [sic] which has been mentioned under its name in several places, & made a poem out of it, & put verse of it on her title page, which is exceedingly annoying[sic] but may be chance. (*The Collected Letters of W. B. Yeats: Volume One: 1865-1895* 426)

これは、1895年1月20日付、Katharine Tynan Hinkson宛の手紙における彼の言であり、彼女は Hopper の書評を書いたこともあり、本一冊を買うにも窮する状態であった Yeats に *Ballads in Prose* を貸してくれたため、その返礼も含めての感想である。

この Nora Hopper はアイルランドの伝統に根ざした作品を書いていたが、剽窃的な部分が多く、しばしばその種の嫌疑がかけられていた。しかしながら奇妙なのは、自分自身のオリジナリティは主張しつつも彼女の剽窃に対して特に争うという姿勢までは見せようとしなかった Yeats の態度である。後に彼は彼女の剽窃に関して擁護まで行っている。上記の引用においても、強い戸惑いを見せていながらも “but may be chance” と述べているところに、彼の心情が見て取れる。この “chance” が指し示すのは、Hopper が “The Wind among the Reeds” と題する詩を作ったことなのか、それをタイトルページに載せたことなのか定かではない。いずれにしても、彼自身にとって困惑させるような出来事に対し最終的な判断を避けている。

Yeats が彼女を糾弾した理由として推測できるのは、この “The wind

among the reeds” という表現が、極端に奇抜なものではなく、特にアイルランドの伝統に根ざして創作活動を行っている作家ならば、その手からこの表現が出てくる可能性は皆無ではないと Yeats が感じていたからではないかということである。それは、意味論の核として「風」を中心においた表現方法にその理由が求められるかもしれない。そしてこれはケルト文化の特性にその起源が求められるかもしれないのである。

### III

もちろん視覚において捉えることができないことが大きな理由といえるが、風は直接表現できない。しかしながら、いや、それだからこそ、風を表現したいという誘惑は何にもまして大きく、その神秘的存在を魅力的にする。Lyall Watson は次のように述べる：

All wind's properties are borrowed. Our knowledge of it comes at second hand, it comes strongly. And this combination of a force that cannot be apprehended, but nevertheless has an undeniable existence, was our first experience of the spiritual. A crack in the cosmos that widened to let the tide of consciousness flow through. (*Heaven's Breath* 8)

Watson の言葉は、冒頭で説明を行った風に対するアプローチの2大潮流を一まとめにしたものといってよい。風は説明の領域を超越していながらも、間違いなく物理的な力であり、同時に我々の生命の不思議さの根源を求めることのできる審美的なものである。

この、科学的、審美的といった両側面を刺激し続ける風のことを、Watson ははっきりと“an undeniable existence”といている。それを表現するものにとって、その存在は確固たるものなのである。彼の言うように、風は間接的にしか表現できない、風力にしろ、汎神論的な比喩にせよ、そこに模倣は成立しえない。それでもなお、そうした間接的な経路を迂回しながらも、その表象の中心は風そのものなのである。

一方、“the wind among the reeds”はどうであろうか。ここでも、風を表現

するために葦が間接的な役割を果たしているのは同じである。しかしながら、Allen R. Grossmanによる解釈に見られるように、その表象の中心は詩的創造行為から、その創造を行使する主体である詩人の方、つまり豎琴に向かってしまう。先述のように、このフレーズの意味論的核が風にあるにもかかわらずである。

それでもなお、“aeolian harp”と読み換えを行いながら、詩的創造行為にその中心をおく限りにおいてGrossmanの解釈は正しい。なぜなら、Yeatsが“the wind among the reeds”によって表現しようとしていることの中心は、詩的創造行為に他ならないからである。その差異は、「豎琴」を語ることによって詩的創造行為を表現するのか、「風」を語ることによってそれを遂行するのかにある。前者は詩的創造行為の主体である「豎琴」が主役であり、中心がそのまま貫かれている。それに対して後者は主役であるべき「風」はいつの間にか、脇役となっており、いわば脱中心化が行われているといえる。

もちろん“the wind among the reeds”において、詩的想像力の源泉としての「風」がもともとの主役であったと考えることも可能である。しかしながら、豎琴は風を待つことはできるが、豎琴がなければ風はただの風である。実のところ豎琴は風が吹かなくとも、静謐にその感受性を働かせることもできる。詩的想像力の主体はあくまでも豎琴、つまり詩人にある。

風は吹いてこそ風であって、その変化にこそ意味がある。そして中心であるべき位置にいながら、脇役となっている、風のこの脱中心的な役割は、ケルト文化の本質から生み出されているように考えられる。Yeatsの風に対する認識は、彼の後期の創作の基盤となっている *A Vision* における神秘主義の主要なシンボルである螺旋、渦巻きとは切っても切り離せない関係にあり、この螺旋、渦巻きこそ、ケルト文化の本質を象徴する形象なのである。

鶴岡真弓は詩人、辻井喬との対談の中で、渦巻きという形象とケルト文化の特異性について次のように述べている：

ケルトの修道士たちが、キリスト教の図像学とはまったく相容れない渦巻きの文様を延々と描き続けてきた。このことに象徴される根源的な「杵」の問題化に、少しこだわってみたいです。

[...]キリスト教の教えでは、神は自らの姿に似せて人間を作られたとされていますが、「神人同系」つまりアンソロポモルフィズム（人像中心主義）が西欧の表象、イメージの中心になっているのです。常に人の像が中心にあって、神もまた人間の形をしている。人（の像）がいつも中心に立っている。あくまでも人の姿に執着する、常に人間というイメージ（像）がそこにいるわけです。ところがケルトの人たちは、ヨーロッパでありながらひたすら、渦巻きだけを描き続けてきた。人間の形、イメージから限りなく離反した。人を描かず、何かこの世の背後にあるものを渦巻きという形であらわそうと執拗に続けてきた。人を中心とすることに根本から懐疑的だったのです。（『ケルトの風に吹かれて』134-36）

このように鶴岡はケルト文化を西欧の人間中心主義から遠くかけ離れたものとして規定する。その中で渦巻きは、人間から焦点を外した時に見えてくる、この世における充満を表象しているのだと考えている。

焦点が当てられていたものから目をそらすことによって、他のものが見えてくるとするのはその通りである。同時に焦点化とはすなわち固定化であるわけだから、焦点を外すということはそのまま動性が入り込むことにつながる。そうすることによってすべての存在の輪郭はぼやけ、その周囲と交じり合う。さらに鶴岡は、そうした個々の存在の媒介物としての役割を、渦巻きに対して指摘する：

実際、ギリシャ・ローマの目から見ると、ケルト人は非常に「グロテスク」な形ばかり造っているように見えます。たとえば直径十センチくらいの腕輪を横から見ると、そこに人間の顔のような形がふっと一瞬出るんですが、次は髪の毛か耳か判別できない渦巻き文様が浮かび上がり、その渦巻きがまた次には人間の顔を転倒させたような形に変貌していく。あるいは器物と、顔と、ロクロ首がつながって、動物「らしき」形になる。グリフォンとか、ドラゴンとか、そういう名づけを一切拒否する「形なき形」しか現れることがない。（154-56）

鶴岡が指摘するような意匠にはすでに「人間らしき」姿しか存在せず、架空のものを含めた動物、あるいは物体、あらゆる存在が混沌の中で、それらの姿をおぼろげに浮かび上がらせるのみで、そこには、鶴岡の言葉をそのまま借用すれば、「文節」化されることのない連続した生命が展開されており、その連続



を支えるものこそが文様としての渦巻きなのである。

正確に言えば、個々の存在が渦巻きによって溶解させられ、生命全体の中に連続させられているという表現は誤りである。ケルト人の認識はまったくその逆で、充滿する生命が時折一定の形を取ったかのように見えるだけなのであって、個々の存在は単なる刹那的な仮像に過ぎないといえる。ギリシャ・ローマ文化と対立する流転的な存在の認識、表象は明らかに、冒頭で述べた、風を *existence* として認識する文化とは相容れない。そして、そうした文化意識を共有していたからこそ、Yeats は Nora Hopper に対する判断を留保したのではないだろうか。

こうして、風を単に詩的想像力の源泉としてのみ捉えるのではなく、ケルト文化に特徴的な存在の母体として捉えると、“the wind among the reeds” においてなぜ、風が脱中心的な役割を担っているのかよく理解できる。風は存在の母体として、この場合、詩人としてのシンボルである葦を成立させるために不可欠なものである。しかしながら、風は決して中心を占有することではなく、あくまでも全体の一要素でなければならないのである。同時に Grossman の解釈にあるように、葦、あるいは豎琴は詩的創造行為の主体として中心に位置する。しかしながら、この中心は常に仮象に過ぎず、これもまた全体の一部である。

#### IV

ここまで述べてきたように、Yeats の風に対する認識は、まずもって、存在の隙間に充滿する生命を見て取ることに始まるといえる。しかしながらそれは単にネガとポジを反転させるということではなく、秩序の背後の混沌を見るように、存在の輪郭を解体することである。このように現世における認識の枠組みを解き放つ媒介物として、風は重要な役割を持ち、詩集 “The Wind among the Reeds” の冒頭を飾る “The Hosting of the Sidhe” において、彼の地へ誘う要請の女王 Niam の言葉に呼応するかのようには風はざわめき始める：

The host is riding from Knocknarea  
And over the grave of Clooth-na-bare;

Caoilte tossing his burning hair,  
 And Niam calling *Away, come away:*  
*Empty your heart of its mortal dream.*  
*The winds awaken, the leaves whirl round,*  
*Our cheeks are pale, our hair is unbound,*  
*Our breasts are heaving, our eyes are agleam,*  
*Our arms are waving, our lips are apart;*  
*And if any gaze on our rushing band,*  
*We come between him and the deed of his hand,*  
*We come between him and the hope of his heart.*  
 The host is rushing 'twixt night and day,  
 And where is there hope or deed as fair?  
 Caoilte tossing his burning hair,  
 And Niam calling *Away, come away.*

この詩に現れているように、人間にとっては死をあらわす妖精の世界への誘いにおいて、常に繰り返されるのは、“between”, “twix” であって、それらは秩序立てられた現世の世界の分節に入り込みそれを解体していく。

The Sidhe は妖精であり、その存在は風と強く結びついている。Yeats は “The Hosting of the Sidhe” に付けた注において the sidhe と風との関連について触れ、木の葉が渦を巻くのを見るとアイルランドの田舎の人は the sidhe が通り過ぎたのだというエピソードを紹介している (*The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats* 800)。それでは、ギリシャ神話のイオロスと同様、the sidhe は風そのものを擬人化したものかということ、すくなくとも Yeats の創作においては厳密にはそうはならず、彼は sidhe と風とを区別している。

Yeats は同注において、裕福で権力を持った人々は、古のアイルランドの神々を “the Tuatha De Danaan” あるいは “the Tribes of the goddess Danu” とよび、貧しい人々は “the sidhe” と呼ぶのだという呼称に関する分類を行った後、次のように続ける、“Sidhe is also Gaelic for wind, and certainly the Sidhe have much to do with the wind” (800)。この主張は以下のように解釈できる。つまり、“sidhe” という「語」はゲール語で風を表すが、“the sidhe” という「妖精」は風その

ものではなく、風と大いに関係を持っている別の存在であると。

The sidheは風に乗って現れるため当然風との関連は深い。少なくとも“The Hosting of the Sidhe”において、その区別は行われていないように思われる。5行目の風のざわめきは、the sidheがその活動を始めたことを表現しているし、13行目において昼夜の明確な文節の間に入り込み、現世の秩序を解体せんとする “[t]he host” はもちろん風の特徴の代行者としての “the sidhe” である。しかしそれでもなお、Yeatsの中ではthe sidheと風は区別されており、風はより抽象的な概念の表象である。“The Hosting of the Sidhe” では、その概念の暗喩として機能するという意味においてthe sidheは風と一体化しているのである。

それでは、その概念とは何か。Yeatsは “The Lover asks Forgiveness because of his Many Moods” に対する注の中で以下のように述べている：

I use the wind as the symbol of vague desires and hopes, not merely because the Sidhe are in the wind, or because the wind bloweth as it listeth, but because wind and spirit and vague desire have been associated everywhere. A highland scholar tells me that his country people use the wind in their talk in their proverb as I use it in my poem. (*The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats* 806)

Yeats自身によるこの説明からも明らかなように、彼の風に対する意識の中心にあるのはthe sidheとの関連性ではなく “spirit” および “vague desire” との観念的な連想なのである。そして、ここで “spirit” と表現されているのは、妖精のような霊的存在のことではなく、この引用の冒頭で説明されている “hope” に近い、極めて人間的な希望や意欲のことを指すのであろう。

*The Wind among the Reeds* は A. Norman Jeffares が指摘するとおり、2人の女性との恋愛関係をその背後に抱えている (100-103)。特に彼にとって、あらゆる理想の象徴である Maud Gonne に対する断ち切れない思いは、痛々しいほどでもある。一方この理想の女性は恋愛対象として彼を見てはくれない。“The Lover asks Forgiveness because of his Many Moods” に謳われている希望や欲求はこうした現状からの脱却、すなわち変化への希求なのである：

If this importunate heart trouble your peace

With words lighter than air,  
 Or hopes that in mere hoping flicker and cease;  
 Crumple the rose in your hair;  
 And cover your lips with odorous twilight and say,  
 'O Hearts of wind-blown flame!  
 O Winds, older than changing of night and day,  
 That murmuring and longing came  
 From marble cities loud with tabors of old  
 In dove-grey faery lands;  
 From battle-banners, fold upon purple fold,  
 Queens wrought with glimmering hands;  
 That saw young Niam hover with love-lorn face  
 Above the wandering tide;  
 And lingered in the hidden desolate place  
 Where the last Phoenix died,  
 And wrapped the flames above his holy head;  
 And still murmur and long:  
 O Piteous Hearts, changing till change be dead  
 In a tumultuous song': [. . .]. (lines 1-20)

彼を一顧だにしない不動の構えを見せる相手に対する苦悶のうねりは、その静と動の鮮烈な対照ゆえに変化を求める大きなエネルギーを内包している。そしてその変化を鼓舞する風は間違いなく彼の国から吹いてきており、冷徹な事実を突きつける現実に抵抗するよう急き立てるのである。

このように、Yeatsの風はすなわち変化である。これは人間的な精神性を孕んではいるが、それは精神そのものというよりは、その精神を突き動かす衝動である。精神に平穏は訪れるが、風にはそれがない。なぜなら平穏とは風がない事であるからである。先に述べたように変化の中にしか風は存在しない。この精神と衝動との関係の中にYeatsが“vague desire”のように、わざわざ“vague”を用いている理由が見えてくる。それはつまり、端緒としては常に不明瞭で、所在の特定できないものであり、精神のようなものを突き動かすことによって初めてその存在が実感できるような風の性質を指しているといえるからであ

る。これは“the wind among the reeds”というフレーズによって表現されている風の存在そのものである。

## V

もちろん変化といってもそれは解体のほうにばかり向かうわけではない。混沌の中から秩序を生み出すのもまた変化である。変化は逆に静の瞬間があってこそ強く認識できる。この静を中心とした風のもたらす変化の双方向性を最後に確認しておきたい。その静とはYeatsにとって普遍性の究極の象徴である薔薇である。

Frank Hughes Murphyによれば、Yeatsの作品においては精神的な愛、永遠の美、知性と美など数多くの象徴として薔薇が用いられている（34-35）。その詩のひとつが*The Wind among the Reed*所収の“The Secret Rose”であり、もちろんこの詩におけるバラはMaud Gonneを指し示している。しかも、Murphyが挙げるようなすべての美德が具現化された存在としてのMaud Gonneと重ねられている（Peter Alderson Smith 176）。

“The Secret Rose”において風は、恋愛の希望を打ち砕くと同時に普遍なるバラの栄光の追い風となるものでもあり、一方にとっては解体の、他方にとっては創造の役割という両面性を持った、存在として描かれている：

[.....]

And him who sold tillage, and house, and goods,  
And sought through lands and islands numberless years,  
Until he found, with laughter and with tears,  
A woman of so shining loveliness  
That men threshed corn at midnight by a tress,  
A little stolen tress. I, too, await  
The hour of thy great wind of love and hate.  
When shall the stars be blown about the sky,  
Like the sparks blown out of a smithy, and die?  
Surely thine hour has come, thy great wind blows,

Far off, most secret, and inviolate Rose? (lines 22-32)

ここに描かれた普遍なるバラはもちろん、万物が流転するという認識に反する存在であることは明らかである。このようにケルト文化の志向性に反するものを内包することによってYeatsは、彼の独自性を主張していたとも言える。

しかし、最後に置かれた疑問符は何を示すのであろう。これは静謐の最奥に祭られたこの薔薇が普遍であるということに対する異議ともとれるし、単なる問いかけともみられる。いずれにしても、断言が避けられることによって、この薔薇の普遍性が不安定になっていることに間違いはない。さらに空間的な配置から考えても、薔薇は見るものの目から隠されており、その姿を見ることができない。吹く風だけがその存在を暗示している。つまり、その普遍性を含めて、薔薇の存在自体が風に絡めとられているのである。これは鶴岡が指摘するような「形なき形」の連続体を立体的に配置したものと考えてよいのではないか。つまり、この薔薇もまた万物流転の中にいるのである。

風は目に見えないが、万物流転の原動力として大きな役割を果たしている。こうした目に見えない存在を可視の形象と共に描き、物象の充満した世界を謳いあげる伝統がケルト人にあったとすれば、少なくとも風という観点に関してYeatsはそれを受け継いでいる。しかしこうした風に対する認識は、決して古臭いものではなく、逆に現代文明にとって不可欠なものといえる。吉野正敏が『風の博物誌』の中で、栄華が去り機能が弱まった都市に、いかに自然が厳しさを指摘している（48-49）。風は砂塵を吹きつけ、都市を風化させ瞬く間に廃墟へと追いやってきた。興味深いのは、そうした古代文明の栄枯盛衰を近代的超高層ビルに重ね合わせて見ている吉野の眼力である。高度の耐震構造を備えたビルにとって、地震よりも恐ろしいのは風が運んでくる細塵や塩分である。職人技によるふき取り作業を駆使して常にこの脅威に対して「抵抗」していなければ、長高層ビル群も遅かれ早かれ古の文明と同じ運命を辿ることになるのである。この意味でケルト文明の自然認識は観念的な意味でも即物的な意味でも普遍性を持っており、この見えざるドラマを風に託したYeatsの認識は、物質文明が加速し始めた19世紀末を背景に考えれば、より深遠な意義を持つのではないであろうか。

引用文献

- Grossman, Allen R. *Poetic Knowledge in the Early Yeats: A Study of the Wind among the Reeds*. Charlottesville: UP of Virginia, 1969.
- Hopper, Nora. *Ballads in Prose*. London: J. Lane Bodley Head, 1894.
- Huler, Scott. *Defining the Wind: The Beaufort Scale, and How a 19<sup>th</sup>-Century Admiral Turned Science into Poetry*. New York: Three River, 2004.
- Jefferies, A. Norman. *W. B. Yeats: Man and Poet*. New Haven: Yale UP, 1949.
- Kelly, John ed. *The Collected Letters of W. B. Yeats: Volume One: 1865-1895*. Oxford: Clarendon, 1986.
- Murphy, Frank Hughes. *Yeats's Early Poetry: The Quest for Reconciliation*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1975. 33-34
- Shelley, Percy Bysshe. "A Defence of Poetry or Remarks Suggested by an essay Entitled 'The Four Ages of Poetry'". *Shelley's Poetry and Prose: Authoritative Texts: Criticism*. Ed. Donald H. Reiman and Sharon B. Powers. New York: Norton, 1977. 480-508.
- Smith, Peter Alderson. *W. B. Yeats and the Tribes of Danu: Three Views of Ireland's Fairies*. Totowa: Barnes and Noble, 1987.
- 辻井喬, 鶴岡真弓. 『ケルトの風に吹かれて』. 東京: 北沢図書, 1994.
- Watson, Lyall. *Heaven's Breath: A Natural History of the Wind*. New York: William Morrow and Company, 1984.
- Yeats, William Butler. *The Collected Poems of W. B. Yeats: A New Edition*. Ed. Richard J. Finneran. Houndmills: Macmillan, 1983.
- . *The Variorum Edition of The Poems of W. B. Yeats*. Ed. Peter Allt and Russell K. Alspach. New York: Macmillan, 1957.
- . *A Vision*. 1937. Houndmills: Macmillan, 1965.
- 吉野正敏. 『風の博物誌』. 東京: 丸善, 1991.

## Synopsis

Wind and Presence: W. B. Yeats's *The Wind among the Reeds*  
Ryuji Ishikawa

This paper aims to examine the concept of wind in W. B. Yeats's *The Wind among the Reeds*. In contrast to mainstream Western thought, Yeats bestowed a less autonomous but more vital role to the wind. His unique idea is exemplified in the title of the volume and the three poems: "The Hosting of the Sidhe," "The Lover asks Forgiveness because of his Many Moods" and "The Secret Rose."

The concept of the wind in Western thought can be classified into two main ideas; one is scientific investigation of the wind as a natural phenomenon and the other is its aesthetical translation. The origin of the former dates back to Aristotle. The latter was already observed in Homer's works and the Bible, though its primary root is not traceable.

Yeats's concept of the wind opposes the above two streams of Western thought in that he regarded the being of the wind as a "presence" while the other aforementioned two promote the idea of "existence." "Presence" signifies the recognition of a being in relation to others while "existence" implies an autonomous bearing of an object. Yeats saw the wind as an element of the organic whole. On the other hand, the two schools observe that the wind is an independent entity.

The difference originates from the concept of the universe. The Greco-Roman school tends to assume the universe provides a static order in which every being is independently arranged. On the contrary, the ancient Celtic culture from which Yeats's poetics evolved, conceives of the universe as a transient representation of matters that are continuously interchange and interchanging with each other.

The wind in Yeats's *The Wind among the Reeds*, as in the ancient Celtic figures, asserts its presence as a medium between earthly matters which seemingly claim their independent existences but are always subject to



transformation. The wind cannot be seen, but it suffuses and develops the universe, spiritual and material, as its fundamental element. Focusing on the wind, notably in the title of the volume, Yeats decentralized the authorized eminence of transient matters and transposed them onto the backdrop of an ever-changing universe.